知識を習得
成果を発表

少人数によるディスカッション形式で専門知識を習得し、学習成果を発表、卒業論文を書き上げるゼミナール。教員や仲間たちとの関わり合いにより、コミュニケーション能力も高められる。学習成果を学外に発信するチャンスもあり、さまざまな出会いの場にもなる。各ゼミ（ネットワーク情報学部はプロジェクト）の成果を紹介しよう。

ゼミは未来をひらく出会いの場

経済・遠山ゼミ

学生が商品化に協力
芳香カード売れ行き上々

▲「アロマ」を手にする遠山准教授と、左から井上さん、大村さん、萩原さん、小林さん（生田購買会）

経済学部・遠山ゼミ（指導・遠山浩准教授）の学生が商品化に協力した芳香カード「アロマ レ・フレール」の販売が、生田キャンパスの購買会で昨年12月9日から始まった。

川崎市の町工場＝中堅企業と開放特許の利用契約を結び製作。学生がアイデアの検討や市場調査を担った。店頭販売はここだけ。機能、デザイン、優待価格が支持され売れ行きは上々だ。

「アロマ」は中央部に特殊なセラミックス製チップを組み込んだプラスチック製カード。アロマオイルや香水をチップに数滴垂らすと約72時間香りが続く。水洗いして他の香りでも使えるのが特長で、デザインは6種類。メーカー希望小売価格1575円だが専大では880円で販売されている（いずれも税込み）。

同購買会のレジ正面の売り場は、大村友香さん（3年次）がおしゃれに飾り付けた。「名刺入れやポケットに入れて好みの香りを携帯できます」と大村さん。贈り物として好評で、1カ月で約10個を販売。アロマオイルの販売を求める声も寄せられている。

「アロマ」誕生の舞台は、川崎市と同市産業振興財団が主催する「川崎市知的財産交流会」（以下「知財交流会」）。プラスチック成形・加工の松本製作所（中原区、松本浩秀社長）と、「芳香発散装置」（特許出願中）の再利用先を探す富士通、「中小・ベンチャー企業研究、地域産業研究」をテーマとする同ゼミが出合い、松本社長が一般向けの自社企画商品の開発に乗り出した。

同ゼミの現3、4年次生は香るメガネやブックカバーなど6つのアイデアを提案。その中で萩原恭子さん、井上あいみさん、小林真唯さん（いずれも4年次）は「用途は自由に」とチップ単位での販売を求めた。チップは破損しやすく、技術者を「破天荒だけど新鮮」と刺激するひと幕も。松本社長は「学生さんとのディスカッションを通じてカード型という構想が固まった」と振り返る。

萩原さんらはインターネットで若い女性の香水に対する意識や使用状況を調べ、試作品のデザインにも感想を伝えた。

構想から1年半、チップに施す気孔の割合を調整し耐久性にも考慮した「アロマ」には町工場の技術の粋が詰まる。3人も「就職したら社員証ホルダーに入れる」と認める出来に仕上がった。

同財団によると「知財交流会」を通じての商品化は8件目。学生が関わったケースとしては初という。遠山准教授は「企業とうまくかみ合い、ビジネスを組み立てる段階で関われた」と評価。今後もゼミで開放特許の商品化に挑む計画だ。

同ゼミは川崎市高津区の町工場の振興に力を入れており、2月16日には各社の技術や製品を紹介する体験イベント「ものまちプラザ」（川崎市「てくのかわさき」で開催）に3年次生が、下野毛地区の工場開放イベントに2年次生が、それぞれ運営スタッフとして参加する。

経済・原田ゼミ

川崎市議会を傍聴
市政に触れた貴重な経験

▲左から原田教授、赤堀さん、有光さん、神林さん、松本さん

地方財政論や公共選択論などを学ぶ経済学部の原田博夫ゼミの学生4人が12月20日、川崎市議会が発行している議会広報紙「議会かわさき」の企画で市議会を傍聴した。

参加したのは3年次の赤堀匠さん、松本貴久さん、2年次の有光拓也さん、神林梨紗さんの4人。

ゼミ生たちは、傍聴席で2013年第4回定例会を見学。昨年10月の市長選挙で初当選した福田紀彦市長にとっては初めてとなる議会でもあり、議場には緊張感が満ちていた。ゼミ生たちは特に市長と木庭理香子議員の質疑応答を、メモを取りながら熱心に聞いた。

傍聴後には議会局からインタビューを受けた。ゼミ生は「こういうふうにして川崎市が作られているんだと感じました」「質疑がちょっと早口」「市長と直接対話できる区民車座集会に参加してみたい」など、初めての議会傍聴の感想や市議会に対する意見を積極的に述べた。

その後、議長応接室で浅野文直議長、飯塚正良副議長と面会。議会運営の苦労や進行の工夫などを聞いた。

赤堀さんは「公務員を志望しているので、市政に触れることができ、良い経験になりました」。松本さんは「政治の現状を知りたいと思い、参加しました。これをきっかけに、さらに理解を深めていきたい」と感想を話した。

原田教授は「学生はこの機会を生かそうと、傍聴を前に自主的に勉強して臨んだ。この経験は今後のゼミ活動にも生きてくる」と、参加の意義を語った。

この模様は、2月15日に発行される「議会かわさき第99号」に掲載される。

経済・徳田ゼミ

商店街の活性化に一役
イベントで住民交流も

▲イルミネーション最優秀賞の南生田中の皆さんと徳田ゼミ生

地域活性化をテーマにする経済学部・徳田賢二ゼミ（代表＝南渕遼さん・2年次）は、川崎市の長沢商店街の活性化と地域住民の交流に一役買っている。

昨年末にはクリスマスイベントとして、同市多摩区・麻生区にまたがる長沢地域の小中高6校（長沢小、南生田小、長沢中、南生田中、百合丘高、生田高）と協力。児童、生徒たちに作ってもらったイルミネーションで師走の街を彩り、出来栄えを地域住民の投票で競うコンテストを実施した。

その表彰式が、12月23日に百合丘高で開催された合同音楽祭「ながさわにこにこハーモニー」の席上行われ、最優秀賞の南生田中美術部の作品のほか、それぞれの学校に賞が贈られた。

合同音楽祭は「学校を中心にしたつながりをもとう」と、地元の長沢まちづくり協議会が主催。今年で2回目になる。6校の音楽サークルなどが参加。チアリーディングの演舞、合唱、吹奏楽、ダンスなどが披露され、約1000人で埋まった会場から拍手や大歓声が湧いた。

徳田ゼミ生は、当日の表彰式の司会進行のほか合同音楽祭の運営にも協力した。

サンタクロースの衣装に身を包んだ白石瑠依さん（経済2）は「準備に半年前から携わり、先を考えて物事に取り組む姿勢を学びました。商店街のさまざまな人と交流を持ったことも素晴らしい体験」と笑顔で語った。

徳田ゼミは昨年10月には、「しんゆりフードフェス2013」（主催＝NPO法人しんゆり・芸術のまちづくり）で、新百合ヶ丘・柿生・百合ヶ丘地域の飲食店とともにオリジナル料理を考案、地元の食の活性化にチャレンジした。

文・板坂ゼミ

韓国・大田大学とネット共同授業
テーマは「異界からの訪問」

▶大田大学側に質問をする板坂ゼミ生

▶大田大学の閔教授と学生たち

日本の文学・文化の古典からサブカルチャーまで学ぶ文学部の板坂ゼミ（指導・板坂則子教授＝江戸期文学文化）は、海外の大学と「ネット会議」のシステムやソフトで結び、共同授業や遠隔授業を2004年から行っている。相手国はアメリカ、カナダ、イギリス、イタリア、ドイツ、韓国など。リアルタイムの授業を通して外国人の教員や学生と意見を交わす貴重な場となっている。

昨年11月26日には、韓国・大田（テジョン）大学（大田広域市）で日本語日本文学を学ぶ教室（指導・閔丙勲（ミンビョンフン）教授＝平13院文博）と生田キャンパスを結んで共同授業が行われた。同大学とは2年ぶりの開催。日本側は板坂ゼミ生ら45人、大田大学側は35人が参加した。

午前11時、板坂教授が「韓国の皆さん、こんにちは」と切り出すと、閔教授が少し間を置いて画面に現れ、「韓国はインターネット大国と言われますが、私のように機械に弱い人間もいます」と応じた。両校に笑顔が広がり緊張がほぐれた。

この日のテーマは「異界からの訪問」。大田大学側は韓国の説話『バリテギ』とジブリ映画『千と千尋の神隠し』を異界往還の視点から取り上げての比較論。板坂ゼミ側は『異世界からの訪問『竹取物語』と月について』と、日本映画『サマーウォーズ』を例に「SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）という異界」を発表した。

発表後、板坂ゼミ生が月に対する韓国のイメージについて質問。大田大学側から「〝陰〟のイメージだが、子どもをほしい女の人が月に願いをかけるなど特別な存在」との答えが返ってきた。

大田大生からの「SNSには賛否があるが、皆さんはどう思うか」との問いには「問題はあるが全世界と即座に通じる点は素晴らしい。目的意識を持つことが大切」と板坂ゼミ生が答えるなど、活発な質疑応答合戦に。あっという間に1時間半が過ぎた。板坂ゼミの浦田直樹さん（3年次）は「大田大学生の日本語の力は素晴らしい」と前置きし、「昨今、日韓関係は良くないと言われていますが、韓国の皆さんも僕たちと同じ志を持っていると実感した。ささやかながらの民間外交と思います」と話した。

文・川上ゼミ

雑誌「SHOW」最新号
企画、取材、編集に1年

編集学・出版学を学ぶ文学部日本文学文化学科の川上隆志ゼミ（45人）が刊行する雑誌「SHOW」の最新号が発行された（A4版・全130ページ）。ゼミ生たちが約1年かけて企画、取材、編集の全作業を行った。

第8号となる今号のテーマは「現代の考動力」。編集長の山田瑞希さん（3年次）は「毎号、少しずつ形を変えていますが、今号も自分たちが面白いと思える雑誌を目指し、挑戦しました」と話すとおり、▽カラーページの増量▽二つの大特集の掲載▽レイアウトなどビジュアル面の向上―に取り組んだ。

大特集のうち、巻頭を飾るのは「イルカをいただきます。」。米長編ドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』で反響を巻き起こした和歌山県太地町のイルカ追い込み漁を取り上げる。太地町の漁協関係者らに丹念に取材、「食べるために殺すことは『悪』なのだろうか？」と、同企画の班長・佐々木耀さん（3年次）の言葉で締めくくられた。イルカ漁に見る「食と文化」の違いを考えた企画。

もう一つの大特集「東北の声」は宮城・福島・岩手の3県をめぐり、現地の声を届ける企画。安西華子さん（3年次）を班長とするメンバーが、震災から3度目の夏を迎えた東北で見聞きしたことをストレートに伝えている。

このほか、5本の特集（本のカタチ／ネットの取扱説明書／Job's challenger／教室に潜む縦社会／W杯と五輪）など盛りだくさんな内容。

山田さんは「『何を伝えたいのか』を意識して制作しました。多くの方に読んでいただき、『何か』を感じ取っていただけたらうれしい」と語った。

購読希望者は、生田キャンパス10号館の川上隆志研究室へ。

ネット情報

1年間の成果披露
プロジェクト発表会

ネットワーク情報学部3年次生の必修演習科目「プロジェクト」の発表会が12月22日、生田キャンパスで開かれた。2年次で「コンテンツデザイン」や「経営情報分析」など8つのプログラムに分かれて専門知識を学んだ学生たちが、24のチームを組んで1年間取り組んだ成果が披露された。

アプリの開発、情報サイトの制作、データ分析、映像作品の上映、ものづくり、音楽イベント開催の記録など内容はさまざま。学生は学内外の見学者に熱心に説明したり、参加を呼びかけていた。

▶完成したアプリのデモンストレーション（吉田享子プロジェクト）

▶ポスターを用いてコンセプトを説明（上平崇仁プロジェクト）

ミューザ川崎でコウサ展2014

ネットワーク情報学部の学生有志が主催する学外展示会「コウサ展2014」（諸星静実行委員長・4年次）が2月1、2の両日、川崎市のミューザ川崎で開催された＝写真。団体・個人合わせて11ブースが設けられ、プロジェクトや授業で制作したアプリや作品などを展示。多くの来場者が訪れ、学生たちの力作に関心を寄せた。

また、同展は今回で10回目の開催となり、会場中央にこれまでの歩みを紹介する「コウサ展の10周年」が展示された。

経営・石崎ゼミ

学生1000人に「ゆとり教育」アンケート

経営学部・石崎徹ゼミの遠藤翔太さん、大島拓さん、末次良隆さん（いずれも3年次）の3人が、広告やマーケティングを学ぶ首都圏5大学（専修、駒澤、上智、東洋、日本）の学生有志による「第19回大学生意識調査プロジェクト FUTURE 2013」に参加。メンバー約20人と共に、5大学の学生1000人に「ゆとり教育」に関するアンケート調査を実施し、『『ゆとり』の現実『さとり』の真実』と題した報告書をまとめた。12月6日には、東京の銀座電通ビルで記者発表会が開かれ、8カ月にわたる活動の成果を発表した。遠藤さんの体験記を紹介する。

苦労以上のモノを得た

寄稿　遠藤翔太（3年次）

8カ月間の活動はとても中身の濃いものでした。アドバイザーの方はいらっしゃいましたが、テーマの決定から調査、結果の分析まで基本的に全て自分たちの手で行いました。

毎週月曜日の定例会だけでなくほかの曜日にも集まり、毎日遅くまで作業をしました。思い返してみると、ハードな日々を過ごしたと思います。集まりがある日はほぼ終電で帰り、そこからまた作業、学校に行ってまた作業…。プレスリリース直前の1週間はメンバーの家に泊まり込み、毎日寝ずの作業でした。

しかし、大変だったこと以上に多くのことを得ました。毎日のようにメンバーと意見をぶつけ合い、全員が納得のいくものになるように議論を重ねました。

そこから相手にわかりやすく伝える力や物事をより論理的に考える力を身につけることができました。さらに、リサーチについても調査をする際の注意点やデータの使い方、それをロジカルに組み上げるテクニックなど、より実用的なことを学びました。

そして何より、たくさんの仲間を得ることができました。他の大学の人と共同で行うプロジェクトだったので、交友範囲も一気に広がりました。毎日一緒に作業をして、苦しいことも楽しいことも共にし、8カ月間かけて一つのものを作り上げた仲間たちは、「FUTURE」で得た最も大切なものだと思っています。

「FUTURE」に参加をしたことは私の大学生活で得た大きな財産となりました。来年も後輩たちが素晴らしい調査をして、多くのことを得てくれるよう願っています。

▶記者発表会で発表する専大生

商・渡辺ゼミ

新丸子商店街を盛り上げよう
HPやSNSで店を紹介

「魅力ある新丸子に」―渡辺達朗商学部教授（流通論）の3年次ゼミ生17人は、川崎市の東急東横線新丸子駅周辺の4商店会連合である丸子地区商店街連合会（通称・新丸子商店街、川連昌久会長）活性化プロジェクトに1年間取り組んだ。現地調査を重ね、学生らしいアイデアで、特にシニア世代や子育て世代にアピールできるような商店街作りに知恵を絞った。

川崎市役所や川崎市商工会議所の事業を支援している渡辺教授が、新丸子商店街が独自に取り組む事業に社会的意義を感じて興味を持ったことから始まった。

「商店街の温かさを伝えたい」（ゼミ長の浜田悠介さん）と、寺尾菜見さんらが取材班を編成、魅力的な店を取材し、同商店街ホームページに掲載。3代続いている生花店、客が自由に使える老眼鏡を置く喫茶店など、個性的な店を順次紹介している。

また「ママとシニアにやさしい店づくり」のイメージを高めることを目的にTwitterとFacebookなどSNSによる情報発信強化を提案。新丸子商店街の特徴やイメージを象徴的に表わす公式アイコン（記号やイラストなど）を募集した。

ゼミ生、商店街代表、日本経済新聞社、中小企業基盤整備機構などの外部有識者らによる審査会で、全国から集まった116作品から優秀賞を選び、12月23日、同商店街実施の歳末宝くじ抽選会会場でアイコンの発表と授賞式が行われた。

▶アイコン発表・表彰式で浜田ゼミ長と川連会長（中央の二人）

▶新丸子商店街のメンバーと話し合いを重ねた

ゼミ生たちは商店街の店主さんたちと気持ちが通じ合い、「新丸子が身近になった」と口をそろえる。静岡県沼津市出身の落合美有紀さんは「こうした活動が実家の周辺の商店街にも生かせたらいいと思っています」と笑顔を見せた。

川連会長は「みなさんは夜遅い会合にも参加してくれ、真面目に一生懸命、若者らしいバイタリティで取り組んでくれた。インターネットに弱いわれわれ商店主の相談相手になってくれたのもありがたい。渡辺ゼミと取り組んだ1年を、今後の商店街づくりに生かす」とゼミ生の奮闘に感謝していた。

12月からは2年次生14人が活動を引き継いでいる。

なお、渡辺ゼミは、これらの活動をまとめて、NTTドコモのモバイル社会研究所が主催する「第4回ケータイ社会研究レポートコンテスト」に応募。全34チーム中、優秀賞を獲得した。

2月21日　専修6　初版　02月06日16時31分16秒　C版M版Y版親版